

氏名	WU Qiong (ウ チョン)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第80号		
学位授与日	令和2年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	言葉のない物語 —連続画面によるストーリーの展開に関する研究—		
審査委員	主査	准教授	中村 寛
	副査	教授	松浦 弘明
	副査	元町田国際版画美術館副館長	佐川 美智子
	指導教員	教授	佐竹 邦子

## 内容の要旨

筆者は物語に夢中になっている。ある絵画作品を鑑賞する時、筆者も常にその絵を通して物語を想像している。物語を想像する過程に従い、筆者は作者が作った世界と結びつけるように、より直観的に感情や考えを感じ取れる。したがって、絵により物語を呼び起こし、独自の世界を作り上げ、自分の作品を通して様々な人の心を動かしたら、素敵だと思う発想から、私は絵画を描いてきた。

言葉と異なり、絵の意味は曖昧であるが、その曖昧さこそ、観者に想像の余地を与え、絵の最も魅力的なところだと思うので、筆者はテキストがないことを前提に、ストーリーを展開する作品、いわゆる「言葉がない物語」という絵画を作っている。絵のみにより観者が物語への創出を喚起するために、筆者は長年の実践において、オリジナルストーリー、または既存の物語をに対する再解釈を作品の内容として、様々な材質や手段を試していた。しかし、その目的をうまく果たせなかった。このことに対して、本研究では創作の方法を出発点として、「言葉がない物語」という絵画の在り方を明らかにする上、創作における原理、方法や基本的な形式を考察・まとめる。今後の自主創作の手伝いとなり、また「言葉がない物語」を志す他の作者に、創作理論の方面において参考になるために、本論文は以上の内容をまとめ、全三章から構成されている。

第1章では、まず「絵のみにより観者が物語への創出を喚起する」という自作を通して果たしたい目的と理由を説明する上、本論を導き出す。次は、「物語論」における物語に関する定義と構造を概観し、脱構築の方法で、内容面と表現面という二つの方面から、「連続的に事象(出来事)を表現する」という在り方を明らかにする。

第2章では、創作における「内容」、「構図」と「見せ方」という三つの段階を脈絡として、「連続性を構成する内容の選択」、「単一場面の画面構成」、「連続場面の見せ方」という三つの問題をめぐり、連続画面によりストーリーを展開する原理、方法や基本的な形式を考察・まとめる。第1節では、ストーリーにおけるどのような事象を選択し、内容の上での連続性を構成できるかについて考察する。まずは「因果関係」を基に、「原因を表す事象」と「結果を表す事象」を、連続性を構成する基本的な選択肢として提出し、具体的な作品例を結びつけ、そのような事象を表現する作品の特徴を分析する。そして「三幕構成」の理論を参照し、それぞれ

に「設定」、「対立」と「解決」の役割を持つ3枚の絵により内容の上での連続性を強化する考えを提出する。第2節では、どのように画面構成により、単一場面を表現し、それぞれの事象がストーリー展開の上の役割を果たすかに対して考察する。「視点」を着眼点として、画面内空間について、事象を含め全局を表現する「パノラマ式」、また事象の演出をフォーカスする「劇場式」という形式を提出し、その特徴を分析する。また、画面内の形象の動態が事象表現に対する重要性を説明する。第3節では、まず同一平面において連続画面を展開する手段を「並置」と「分割」に分類し考察する。次は、本という異なる平面の形で連続画面を展開する形式のメリットを説明する。そして、見せ方が制作手段を決める考えを基に、物語、絵画、そして本に関連してきた版画の例を概観する。最後は、版画を制作の手段とし、本を自作の見せ方とすることを明確にする上、自作についての解説を導き出す。

第3章では、自作を対象として、どのように考察・まとめた結果を実践したかを解説する。まず、「現代を記録する」という創作の共通のテーマを提出し、それぞれの作品を通して独自の世界を作り上げるという自主創作の方式を説明する上、「創作における作者の苦しみ」という博士後期課程の作品の主題、そしてどのように旧約聖書の『創世記』を取材し、どのようなストーリーを作ったかを説明する。次は第二章で考察・まとめる内容を呼応し、どのように27枚の絵によりストーリーを展開するかを説明する。論文の最後では、絵による物語の意義を述べる上、全文をまとめる。また、これから理論研究と創作研究上の可能性について言及する。

## 審査結果の要旨

ウ・チョン氏の博士論文「言葉がない物語——連続画面によるストーリーの展開に関する研究」は、制作を基盤とする論文 (practice-based thesis) である。彼が研究したテーマは、第一に絵画における物語性であり、第二に創作者の葛藤など、つくるということをめぐる苦悩である。後者については、とりわけ創世記を参照軸にしつつ、現代における創作/制作のもつ喜びや苦しみを扱っている。「言葉がない物語」と書いているが、ウ氏の意図するところとしては、「文字テキストが付随していない物語」という意味と捉えてよい。要するに、説明的な文章がないにもかかわらず物語が読み取れる絵画ということである。

1章は、「言葉のない物語」としての絵画を見だし、それらの構造と特性を研究するものである。キリスト教絵画やジャン・モアールの写真、リンド・ウォードのワードレスノベルなど、時代を異にするいくつかの作品が扱われているが、いずれも言葉抜きでどのようにしてよりよく物語を描写できるか、という自らのテーマとの関係で論じられている。

2章は、1章を踏まえたうえで、内容、構図、展示の観点から物語を示す方法をひろく検討している。ここでもまた時代を異にするさまざまな作品を、美術史的にはなく、テキストなき物語性にこだわる制作者の観点から分析する。そして最終的に、書物の形式を借り、連続画面を通じて物語を展開する可能性が模索されている。

3章の自作論は、本論の要である。ウ氏はこれまでの作品を振り返り、そこに描こうした物語を言語化し、意味を解釈している。ウ氏が注目するのは、聖書のなかでも普遍度が高い創世記であるが、それをそのまま再生するのではなく、創世を創作と結びつける。創世記の物語の構造を借りながら、現代のアーティストが創作にあたって直面する数々の問題——生みの苦しみ、失敗の数々、行き詰まり、葛藤など——が描かれるのだ。

ウ氏が、テキストなき物語を描くうえで、キリスト教絵画と聖書に注目し、引用したり、依拠したりしていることには、次の二点で意味がある。第一に、聖書にもとづきながら展開されたキリスト教絵画は、文字を読めない人にキリスト教とそのもとに展開される物語を伝達する点で大きな役割を果たしたが、その構造や工夫を自作に積極的に用いようとした点。第二に、

すでにひろく流布したキリスト教、なかでも創世記を引用することで、少なくともキリスト教になじみのある者にとっては入り込みやすい世界を自作内に展開した点。

そのうえで創造行為を、神のものから人のものへと移行させ、そこに生じる問題を描き出そうとした点で、ユニークな試みだと評価できる。また、このような視点から人の創造行為に注目することは、現代の焦眉の課題でもある。

神に委託されていたはずの創造行為を、人が行なうようになるとなりが生じるのか。人が遺伝子を操作し、人工的に人間やそのほかの生命をつくり出す。そのプロセスのなかで、どのような生命が生きるにふさわしく、どのような生命が駆除されたり廃棄されたりするかを、人が選定することになる。人がAIを設計し、そのコントロール下に人が自ら身をゆだねる仕組みをつくりつつある現在では、権力——現代においては神や教会ではなく、企業と国家——は膨大なデータを収集し、管理するようになる。そのプロセスのなかで、自由や権利などの概念もその内容が鋭く変わるだろうし、人や生命の観念すら変化するだろう。この種の創造において、どのような感性と想像力が培われ、どのような意図せざる結果を生むのか。そういうアクチュアルなテーマにもつらなるのが、ウ氏の作品と論考の強みである。

もちろん、審査においては疑義もあがった。1章については、基礎的な文献、とりわけ「言葉」と「テキスト」をめぐる議論が不足しているという指摘があった。また、論点を説得的に議論するうえで、基礎的な文献が不足しているという指摘もあった。

こうした指摘について、ウ氏はすでに十分自覚している。だが、本論の目的はあくまでも視覚表現と物語の関係を、自作にひきつけて論じることである。したがって、今後は物語論やその他の論考を踏まえつつ、やはり制作を通じてさらなる思考展開を試みられるだろう。

また、「言葉がない絵画」「テキストがない絵画」と言いながら、タイトルなどに特定の名前——ヤハウェ、アダム、カインなど——があることで、ユダヤ=キリスト教の含意が強く出てしまうのではないかという指摘もあった。

これについては、今後、再考の余地があるかもしれない。ウ氏の応答を聞く限り、ウ氏の意図は、宗教的なテーマを前面に出すことなく、創造をめぐる問題を今日的な文脈に置き直そうとするものである。それにふさわしい描き方、見せ方は、今後はさらに探究することになるだろう。

以上を踏まえ、作品、論文、口頭試問のすべてを、実技主査、論文主査、論文副査、外部審査員の4名のあいだで総合評価した結果、ウ・チョン氏は学位取得にふさわしいと認めた。論文の質が基準を満たしていることは言うまでもないが、制作を基盤とする論文としては、かなり多くの重要文献・資料にあたり、深く読み込んだうえで完成させた、野心的な論文である。また、論文で追及したことが自作品とも対話し、互いを高め合っている。その点で、制作を基盤とした博士課程においてなし得る探究として、理想的なかたちのひとつと言えるだろう。

制作面でも、ウ氏の作品はきわめて評価が高かった。リトグラフという特殊な技法を用い、物語を連続画面で展開していく力量と画力は傑出しており、今後の作家としての活躍が期待できるだろう。また、彼の考える物語の展開は、印刷物としての本という形なしには成立しえなかった。それゆえ、この伝統的な技術を彼自身が探究し、ブックボックスという形態そのものを制作したことにも、大きな意味があったと言える。

論文執筆、作品制作の両方でこうした力を発揮したウ・チョン氏の、今後のさらなる発展と活躍を期待したい。

(中村 寛)